



環境経済論A

第9講

環境の経済評価②

仮想評価法CVM

- 環境経済評価手法
- ① 需要曲線アプローチ
- (1) CVM
 - Contingent Valuation Methods
- 仮想評価法
- → 1990年代に急速に普及

仮想評価法CVM

* CVM

→ 表明選好法, アンケートによる調査

→ アンケート自体のバイアスとCVM特有のバイアス

① 戰略バイアス

(回答者がアンケート実施者に迎合する回答をする)

② 部分全体バイアス

(ある部分の環境の評価ではなく, 環境全般の評価をしてしまう)

③ 支払い手段バイアス

(租税⇒基金への寄付)

④ 範囲バイアス

(自由回答方式⇒支払いカード方式⇒2項選択法)

仮想評価法CVM

- CVM
- * 1990年代に普及。アメリカで、大西洋におけるタンカーの原油流出事故(エクソン社バルディーズ号原油流出事故)での裁判での損害賠償の根拠とされた。
- 日本においても数多くの環境サービスの評価がなされた。
- * 屋久島、四万十川、瀬戸内海沿岸、釧路湿原、琵琶湖など
- * CVMによる評価額(WTP)は概ね、**1000円～2万円**程度
- → 妥当性？正確性？
- 後の講義において、CVMに対する論争について紹介する。

CVMに関する論争

- * CVMのバイアス問題

... 環境政策そのものというより、質問方法の工夫・洗練化がCVM研究の中心となってしまった。

CVMの評価・意義付け

- ・自然環境に関する価値観形成？
- ・直接民主主義の一形態？
- ・「正しい環境評価額」とは？社会的受入れ可能性が重要？
- ・費用便益分析に利用できるほど確立した手法でない。
- ・環境経済統合勘定(SEEA)での利用は理論的に矛盾する。

環境の経済評価と経済学における「価格」

- ・新古典派:需要価格, 供給価格, 均衡価格
- ・古典派:市場価格, 自然価格(生産価格)
- ・「公正価格」...「正しい価格」(アリストテレス『政治学』)
→古典派アプローチの「固有価格」, 「自然価格」, 「重心価格」

自然価格 Natural Price

ピエロ・スラッファ P.Sraffa